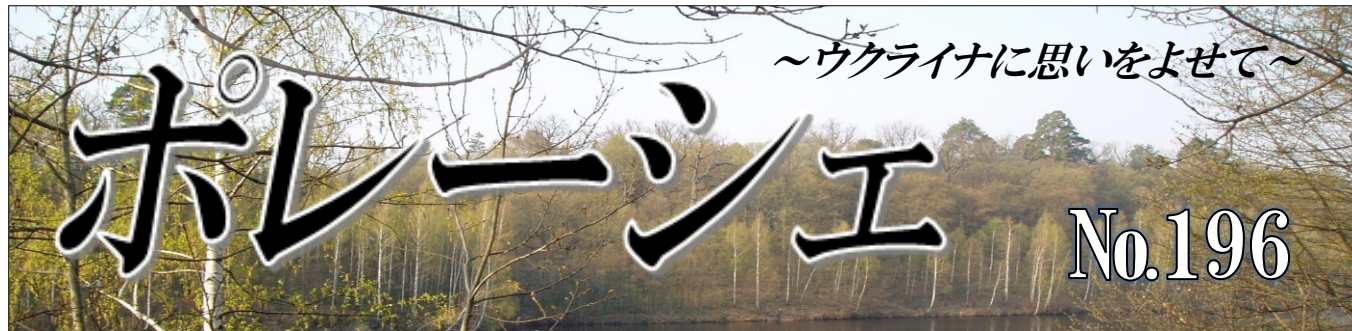


「ポレーシェ」とは、チェルノブイリ付近の湖沼低地帯の呼称です。



2023年9月15日発行 特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部

## 『ウクライナの子どもたちの絵画展』

### 《10/21~22 開催予告》

ウクライナでのロシア軍による戦火は止まず、今日もウクライナの子どもたち、市民の生命が脅かされており、いたたまれない思いです。戦争の長期化に伴い、世界各国の「支援疲れ(?)」という言葉や、人々は戦争の映像やニュースに「慣れ(?)」てしまったとか言われます。それは、個人が「戦争」という異常事態を日常の中に受け入れてしまい、毎年夏の「戦争の教訓」が薄れ、さらに国レベルでの「核抑止力」・「軍備増強」の動きに対してもしかり、と恐れます。実際、人々の関心の低下は、支援の寄付金の落ちこみとして現れています。

現地の団体「チェルノブイリの人質たち」基金、キーウの市民団体「未来」と相談して、ウクライナの子どもたちの絵画展を企画しました。ウクライナの子どもたちは、現在夏休み中ですが、各学校、絵画教室などに呼びかけていて、素晴らしい絵画が届き始めています。また、東海地域に避難している子どもたちにも、日本ウクライナ文化協会(JUCA)を通して参加を依頼しています。戦争という厳しい環境にある子どもたちにとって、絵画という方法「アートセラピー」は、心に負っている傷を開放し癒す有効な方法とされています。ウクライナの子どもたち・人々の命の重さや心と体の痛みを、今一度思いを寄せるために、どうぞ会場にお運びくださるようお願いします。

(『ポレーシェ』本号同封のチラシをご参照ください)

○開催日時:2023年10月21日(土)~22日(日)

10:30~16:00

○会場:名古屋YWCA 2F 会議室

○主催:チェルノブイリ救援・中部

○協力:日本ウクライナ文化協会(JUCA)

名古屋YWCA・名古屋NGOセンター

○後援:愛知県・名古屋市(予定)

○入場無料(会場カンパをお願いします)



## 川口リュドミラさん〔NPO 法人日本ウクライナ文化協会 理事長〕の活動とウクライナー一時帰国

(インタビュアー:戸村)

川口リュドミラさん〔NPO 法人日本ウクライナ文化協会(以下 JUCA)理事長〕は、ウクライナ・ジトミル市出身で、2011年から東海市で家族と暮らし、2013年に JUCA を設立して愛知県を中心に活動されています。去る6月下旬から7月中旬までウクライナへ一時帰国され、その時の様子を伺いました。

Q:ウクライナへの里帰りは何年振りでしたか？

A:本当は、2022年2月24日のロシアの侵攻が始まった2日後の2月26日に帰国予定でした。お土産など荷物の準備も全て整えていましたが、「戦争が始まった!」と聞きびっくりしました。実は、知人からは、「今帰国するのは危ないのでは?」と言われてはいたのですが、まさか本当に始まるとは思わなかったのです。

Q:その時はどんな状況でしたか？

A:ジトミルに住んでいる妹に電話をしたら、その時は「ええっ、朝早いのに何を言ってるの?」という反応でしたが、そのすぐ後に「本当に戦争が始まった!」と連絡がありました。妹の家の近くには軍の関係施設があり、攻撃されたのです。実家のお父さんは病気で、薬が必要でした。

Q:ウクライナからの避難者の支援はどのように始まりましたか？

A:すぐに日本のマスコミ・テレビや新聞社から、問い合わせが殺到しました。そして、JUCAの他のメンバーと相談して、名古屋市栄でデモの申請をして、募金活動の準備を始めました。初めてのことで何もわからなくて、教えてもらいながらやりました。そして、3月22日に妹が2人の子どもを連れて、日本に避難してきました。入国管理局へ行って、手続きをしましたが、これも初めてのことで、時間がかかりました。その手続きの帰りに、戸村さんたちに鶴舞公園でお花見に誘われたのでしたね。その後、いろいろな人たちが避難してきました。

Q:避難者にどんなサポートをしていますか？

A:初めに入管での手続きのサポート、次に住むところを探し、その後、日本語教室を始めました。日本語ができなければ仕事が見つかりません。子どもたちの学校のことも。冷蔵庫や洗濯機なども必要だし、いろんな事が始まりました。名古屋市国際交流課の支援で「つどいの場」や愛知県の支援、日本財団の支援やウクライナ支援ネットワーク等の団体、個人の方のサポートなども、おかげさまで始まりました。

Q:一時帰国はどうでしたか？

A:今回はドイツ・フランクフルト空港からは車で1,700キロを移動しました。国境通過や検問が何度もあり、とても時間がかかりました。たくさんの支援物資を持っていきました。壊れた橋や家も見ました。日本で頂いた寄付金を、キーウの団体などに渡しました。病院に薬を購入して届けたり、お菓子も買って届けました。協力し合った「チェルノブイリの人質たち基金」のドンチェヴァさんとも会えました。

街に出たら、手や足を失った人達がたくさんいました。これからも増えるかもしれません。イルピンも訪れました。もともとはきれいな街でしたが、たくさんの破壊された建物、車などはそのままになっていました。道路などはすぐに修理されていました。

途中で警報やミサイルの音が聞こえ、若い娘さんが教えてくれました。若い人がミサイルの音を聞き分けられるようになっている、これがウクライナの現実であることが、とても悲しいです。



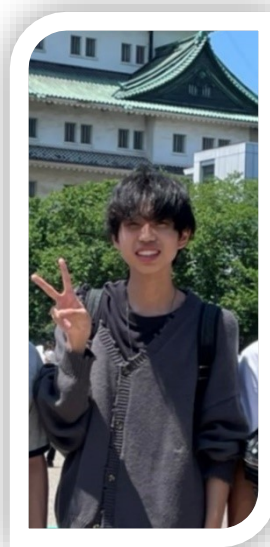


# 2023 年度インターンの久保田蒼です！

みなさん、こんにちは。この度名古屋 NGO センターの研修の一環で、チェル救に 8 月からインターンとして参加している久保田蒼です。少し自己紹介をさせていただきます。

私は小学生の頃から読書と旅行が好きです。読書は色々なジャンルを読みますが、最近はミステリーを好んで読みます。旅行に関しては国内中心に細々と訪れているのですが、本の舞台となった所に聖地巡礼的な気持ちで最近は計画することが多いです。その中でも日本の街並みというのは四季や気候などあらゆる角度から楽しめる風情の一つだと私は感じていて、その風景が災害などで壊されてしまっていることがとても悲しく思いました。そういったことから災害ボランティアを中心に興味を持ちました。

中学、高校は色々なボランティア活動を経験しました。具体的には前述した災害ボランティアの活動として、土壌整理をしたことや、地域支援のボランティア団体に出向きサポートをさせていただきました。コロナ禍により思ったような活動ができなくなってしまいましたが、大学に入ると同時に大学生活やアルバイトを通じて人との関わりをより意識するようになりました。よりボランティアに意欲的になり、今回名古屋 NGO センターの研修を通じ多くの経験をさせていただいています。インターンでも心優しい方々に囲まれてのびのびと業務に取り組ませていただいています。具体的にはクリスマスカードキャンペーンに携わっています。



## 今年も「クリスマスカードキャンペーン」と「ミルクキャンペーン」が始まりました！



クリスマスカードキャンペーンでは、毎年皆様から書いていただいたクリスマスカードをウクライナのチェルノブイリと福島の子ども達に送らせていただく活動です。チェルノブイリと福島は原発事故の影響で、今日まで忘れられない苦しみや問題を抱えた人々があります。そういった人々の心の支援が、この事業の目的です。温かいメッセージや豊かなアイデアなどで飾り付けられた手作りのクリスマスカードを心からお待ちしております。

またミルクキャンペーンも実施します。チェルノブイリでは原発事故の影響で、今も野生のものなど一部食品の汚染の連鎖が続く上に、ロシアとの戦争で不安が募る中、今日を生きる子ども達の健康のため、そして心により添える活動としてミルクキャンペーンを実施しています。そこで有志の寄付を募っています。一人でも多くの子ども達に支援が行き届くようお願いします。

37 年前のチェルノブイリと 12 年前の福島の原発事故について、子ども達は当時の様子を目の当たりにしていません。私も福島第一原発事故の際にはまだ小学校低学年であったため、当時の様子というのはテレビで流れてくるのをただ眺めているだけであり、何か行動ができていたわけではありません。ただ過去の災害によって今もなお苦しめられている子ども達がいる中で、当時行動することが難しかった、でも今何かの行動をした人や今も何かしらの形で行動している人が賛同してくれれば、今日を生きる子ども達の心により添えられると考えます。一人でも多くの子ども達の心の支えになれるように、ぜひご協力の程よろしく申し上げます。(クリスマスカードキャンペーンとミルクキャンペーンの詳細については、同封のチラシを参照してください。)

～ウクライナ支援～

# カテリーナ・コンサート

カテリーナ・コンサート実行委員会 川村伸一

6月17日(土)、名古屋市国際センターで「ウクライナ支援ーカテリーナ・コンサート」を開催しました。チェルノブイリ救援・中部の河田昌東理事の講演「ウクライナと原発危機」、チェルノブイリ子ども基金の佐々木真理事務局長の活動報告を組み合わせ、ロビーではチェルノブイリ原発事故で被災した子どもたちの絵画を展示しました。

当初は、この地方のウクライナ避難民を招待する計画で、チェル救の戸村理事、門田さんのご協力を得たものの、ウクライナ国立民族舞踊団の20年ぶりの来日公演とも重なり、頓挫してしまいました。実行委員会の見通しの甘さを痛感したところです。

さらに、従来からの支援者が高齢化していることの影響は大きく、昔ながらのチラシを配布してツテを頼るという広報活動は手応えを欠いたままで、企画倒れのイベントになることを覚悟しました。

しかし、当日は100席ほどの客席はほぼ埋まり、最後尾に椅子を追加して対応することになりました。回収したアンケートには、「カテリーナの歌声とバンドゥーラの演奏には感動しました」という声が多く寄せられ、河田さんと佐々木さんの講演にも「マスコミからは伝わらない話が聞けて良かった」と評価する声が多数ありました。

予想を上回る来場者があったのは、従来のチェルノブイリ・福島支援の枠を越えて、理不尽な侵略戦争に苦しむウクライナの人々を少しでも支援したいという市民の意思が表れたのだと思います。

いずれにしても、旧来型のイベント企画や広報活動が限界に近づきつつあることを感じ取りました。会場のアンケートからも、3分の2が60代・70代の高齢者なのわかります。主催する側もされる側も10年後に健在でいられるでしょうか。

若者に如何に働きかけていくか、SNS時代のイベントの企画・広報はどうあるべきか、私たちに課せられた重要な課題だと思います。



## チェルノブイリ原発事故と私 ～後編～ 長野県塩尻市在住 関 浩行

チェルノブイリ原発事故から2年後の1988年、伊方原発の出力調整試験から盛り上がった脱原発運動。その中で出会ったのが故・坂田静子さんです。坂田さんは長野県須坂市で今から46年も前の1977年から、「聞いて下さい」という原子力発電の問題を啓発する手作りの情報誌を作り、原発のない長野の地から、反原発の声を発信してきた方です。その始まりはあのスリーマイル島原発事故が起きる前のこと、英仏海峡の小さな島に暮らす娘さんからの手紙がきっかけでした。その第1号の一部を紹介します。「じっとしていられない気持ちから、手作りの小さな刷り物をお手元にお届けします。(中略、以下娘さんからの手紙の内容) 対岸のラ・アークに原子力発電の再処理工場があって、そこから漏れる放射能で牛乳や海産物が汚染されて被害が出始めている上に、近く大拡張の予定との事で、しかも日本の原発の廃棄物の大部分が再処理される予定との事です。(中略) 日本ではこういうことを知っているのでしょうか。」そして第1号は最後にこう結んでいます。『われわれの先祖は罪を犯して既に世になく、われわれはその不義の責を負っている。』哀歌五章七節 子孫をこのように嘆かせないために、私たちは今すぐ、真剣に考え始めようではありませんか。」

「聞いてください」はその後「山国の反原発だより」に引き継がれるまで約12年、35号まで発行されました。坂田さん、運動家でありながらお名前のごとくその語り口は穏やかで、だからこそ重みを感じる方でした。もう一人の娘さんであるドキュメンタリー映画監督の坂田雅子さんの2014年作品、「私の、終わらない旅」の中で、母、静子さんの活動が描かれています。

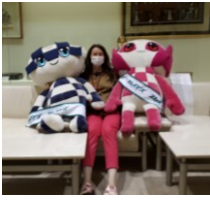
1995年11月13日、「高速増殖炉もんじゅ」の見学会を生活クラブ長野で40名の組合員参加のもと、実施しました。前年に初臨界を迎え、発電を開始したばかりの時期でした。その見学会から一ヶ月もたたない12月8日、もんじゅはナトリウム漏れ火災事故を起こします。事前学習で、冷却材に使っているナトリウムは空気に触れると激しく反応して危険ということを知っていたので、参加者は一様に驚いたものです。その後もトラブル続きのもんじゅは、ご存じのように現在廃炉に向けての措置が取られています。

このように、御前崎訪問から原発の問題を身近に感じざるをえない環境に放り込まれてしまった私は、いよいよ

皆さんと接点を持つこととなります。時が経って2006年の春、伊那の小牧さんから原さんを紹介されました。2001年に生活クラブを退職したのち、滋賀県で展開されていた菜の花プロジェクトを参考に、信州上伊那の地域でもナタネを題材に資源を循環させる取り組みを行おうと「NPO 法人伊那谷菜の花楽舎」を設立し、ナタネの栽培とバイオディーゼル燃料(BDF)の製造を始めて間もない頃でした。「関さんたちの始めた菜の花の取り組みについて話を聞きたいので家に来てほしい」と、原さんのお宅に伺ったのが初めての出会いでした。原さんからチェルノブイリ原発事故の被災地での活動についてお聞きし、その中で、これまでの医薬品や医療機器の支援に加えて、根本の放射能を除去する活動にも力を入れることになり、そこに菜の花の活用を考えている。菜の花プロジェクトを参考にしたいので、次のウクライナ訪問に同行してほしい、とのことでした。私たちが始めたばかりで手探り状態、何の役にも立たないとお断りましたが、BDFを実際に作っているという経験そのものが重要とのこと、その年の9月、同行することになりました。事故後20年、同行訪問したウクライナのナロジチ地区、当時の訪問記はその時のポーシェをご参照いただくとして、あの時一番印象に残ったのが、現地に着いた時のナロジチ地区庁舎内でのこと、原さんの長年の功績に対して「名誉市民賞」が贈られたことです。それまでの活動がこの地でしっかり根付いていることを目の前で実感することができました。そしてこの訪問でのエピソードの一つ。その回の訪問は河田さん、原さんと3人、この時初めてヘルシンキ経由での訪問だったということでヘルシンキ滞在時、港から湾内を一周する観光船に乗ったのですが、その船の立ち寄ったところに世界遺産があったことに3人とも気付かず、下船して初めて知ったのでした。その世界遺産とは、18世紀に当時のスウェーデンがロシアからの侵攻に備えて造ったというスオメンリンナの要塞です。何やら今に通じるものがありますが、このような要塞がそれこそ最後の砦となって、これからは相互理解が進む世の中になってほしいと思うばかりです。

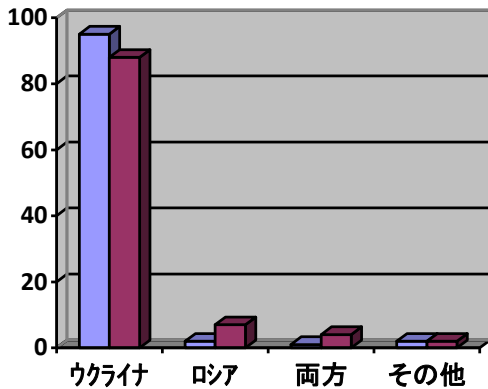
戦争が始まってしまって1年と5ヶ月、皆様と同じようにウクライナへのロシアの侵略戦争が一日も早く終わるよう、毎日願うばかりでいます。

今回のウクライナ危機を迎え、訪ウからだいぶ年月が経ちましたが、この度新たに会員として参加することになりました。皆様、どうぞよろしく願い致します。

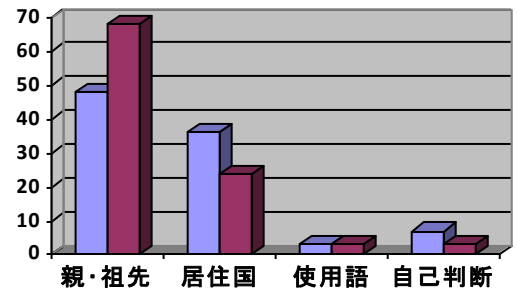


## キーウを逃れて イリーナ・ペトリチェンコ

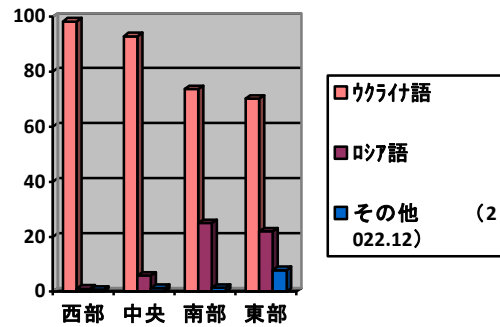
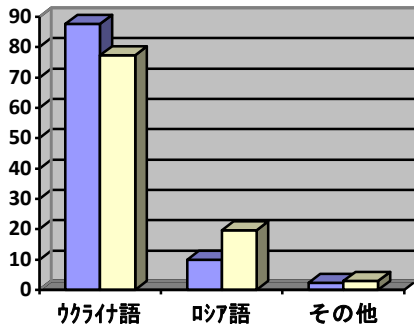
皆さんは質問がお好きですか。私は教員をしているからか大好きで、他人の質問を聞いて初めて気づいたり学び直したりすることも多々あります。先日、ある企業で講演をしていたら時間内に間に合わなかった質問に対して書面での回答を頼まれましたが、もらった質問の一つはいくら考えても分かりませんでした。「ロシア系ウクライナ人」についてのものでしたが、私はこの概念が初耳ですし、誰のことを指しているかも検討が付きません。文字通りなら「ロシアからウクライナへ移住して帰化した人」ですが、そう多くはないはずなのにこの文脈では多数のグループみたいに扱われていました。一方、ロシアの侵攻下に未だに置かれている旨のヒントがあり、ウクライナ南東部の住民であることが分かります。ウクライナの南東部なら、ロシア語が母語のウクライナ人がいますが、本人たちのアイデンティティがウクライナなので何が「ロシア系」か、はっきりしません。そこで当時、何とも答えられませんでした。「ロシア系」が気になり最近のウクライナの世論調査を調べてみました。



ナショナル・アイデンティティとその決定基準\*1 :

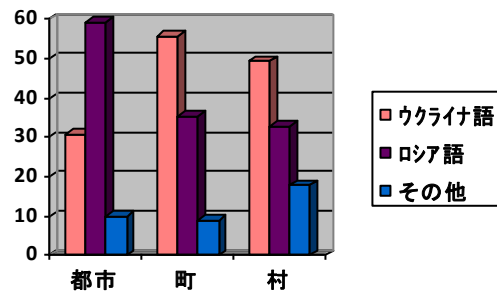
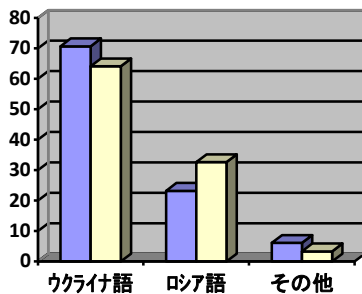


母語だと思う言語\*2 :



家庭での使用語\*2 :

(その内、南東部の居住地別 : 2022.12)



両調査とも 2022 年 12 月に実施された大規模なもの (侵攻地を除くウクライナ全国)。平常時 (2017 年または 2021 年) との比較で分かるのは戦争開始後、ウクライナらしさが意識され元々ロシア語とのバイリンガルな人は侵攻国との差別化で使用語をウクライナ語に切り替えたりしました。そして、家庭内言語と母語との比較では、ウクライナにおいて母語とは選択式のものであることも分かります。(次号へ続く)

※ 1 . <https://zn.ua/ukr/UKRAINE/vijna-sprichinila-svidomij-perehid-na-ukrajinsku-movu-ta-vibir-natsionalnoji-identichnosti-sotsiolohichne-doslidzhennja.html> (2023 年 8 月 15 日閲覧)。

※ 2 . <https://dif.org.ua/article/natsionalna-kultura-ta-mova-v-ukraini-zmini-v-gromadskiy-dumtsi-pislya-roku-viyni> (2023 年 8 月 15 日閲覧)。



国際原子力機関（IAEA）のお墨付きが出た、として東電と国は福島県漁連との約束を一方的に破り、汚染水の海洋放出を決めた。マスコミもIAEAの認可を根拠に国際的な安全基準に合格した、とキャンペーンを張っている。だがIAEAは報告書の中で「海洋放出を決めたのは日本政府で、その結果何が起こっても我々は一切責任を負わない」と明言している。責任のなすりあいの結果、被害を受けるのは福島の漁業者だけでない。地球環境と未来世代の人々である。トリチウム汚染水の問題点についてはこれまで幾度も述べてきた。連載94, 128, 134, 145を参照されたい。

### 切羽詰まった汚染水貯蔵

事故から12年たち貯蔵中の汚染水は130万トン、1061基のタンクはすでに満杯で設置場所がなくなる、というのが海洋放出の根拠である。こうなる事は当初から分かっていた。何故ならメルtdownした原子炉には今も地下水が流れ込み、壊れた屋根からは雨水も入っている。このままいけば際限なくタンクは増える。だが海洋放出の真の原因は別にある。貯蔵タンクの維持費である。膨大な放射能を含むタンクの維持費は現在、年間1000～1500億円という（日本経済研究所）。こうした状況を見越し、国際廃炉研究開発機構の汚染水技術調査チームは2013年に汚染水処理について国際的な技術提案を募集した。世界中から182件の処理技術に関する案件の応募があった。これを経産省傘下の「トリチウム水タスクフォース」チームが検討した。その報告書（平成28年6月）のコスト計算によれば、汚染水の地層注入（～3976億円）、海洋放出（～34億円）、水蒸気放出（～349億円）、水素放出（～1000億円）、地下埋設（～2533億円）等となっている。即ち海洋放出が最も安上がりで、タンク保管よりはるかに安い。実際には汚染水を500倍に薄めて40年間放出を続けなければならないので45億円では到底済まない。

上記以外にも様々な処理技術が提案されたがタスクフォース・チームは何れも実用性に欠ける、として全てを無視し切り捨てた。

### 現実的な汚染水処理

トリチウム水は通常の水と化学的性質は同じなのでALPSのような設備では処理できないが、物理的

性質（質量、沸点、融点など）の違いを利用すれば処理（濃縮）可能である。実例がある。カナダの原発（CANDU炉）は燃料に天然ウランを使い、冷却水に重水（DOH）を使っている。重水素（D）はトリチウム（T）よりも小さく水素に近い。自然水には重水（DOH）が0.015%含まれるが、それを99.97%まで濃縮して数百トンの重水を作り原発の冷却水に使っている。重水と軽水の沸点と電気分解速度の違いを利用している。

世界中から提案のあったトリチウム汚染水処理技術の幾つかを紹介する。（1）GE日立核エネルギー・カナダ（株）は沸点の違いを利用した汚染水処理装置を開発した。福島の汚染水を一日500トン処理できる。この技術を使えば現在の汚染水を7年で1000分の1に濃縮できる。（2）米国のニュークレア・ソリューション（株）はトリチウム水（融点4.5℃）と通常の水（0℃）の違いを利用した簡単な設備を提案した。0℃に冷やした漏斗に汚染水を流せばトリチウム水だけが凍る。（3）近畿大学と東洋アルミ（株）はアルミニウムを使った特殊なフィルターを開発し、汚染水の蒸気を通せば軽水は素通りし、トリチウム水はほぼ100%保持できる装置を開発した。（4）京都大学の研究者は酸化マンガンの特異な結晶をトリチウム水に入れると水がイオン化し、30分でトリチウムイオンだけが吸着する装置を開発した。1日千トンの処理も可能という。極少量に濃縮したトリチウム水は長期保管が容易である。その他、様々な汚染水処理技術が提案されており、実用化すれば3～5年で130万トンの処理は可能で、一日も早く実用化すべきである。費用は数百億円程度である。

（2023年8月19日 河田）

### 【寄付・会員状況のお知らせ】

- ◆6月 寄付／会費 139,500円
- ◆7月 寄付／会費 420,000円
- ◆2023年度累計（ウクライナ救援基金を除く）  
1,115,950円（7月末）
- ◆ウクライナ救援基金 23,417,877円  
（2022/3/7～2023/7/31）
- ◆会員数 177名
- ◆ポレーシェ読者数 668名

～心温まるご支援をありがとうございました～

### 【寄付のお願い】

- ◆一般寄付  
三菱UFJ銀行 高畑支店 普通 1682863
- ◆ウクライナ救援基金  
三菱UFJ銀行 名古屋営業部 普通 6949211
- ◆郵便振替 00880-7-108610  
〈口座名義〉  
特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部

\*クレジットカードでも受け付けております  
（ページ下のQRコードから寄付ページへアクセス！）

※領収書が必要な方はご連絡ください

当団体は「認定特定非営利活動法人」ではございませんので、ご寄附は税額控除の対象にはなりません。  
ご了承のほどお願いいたします。

### 事務局だより

秋のイベントのご紹介・・・。

まずは名古屋・栄の「オアシス21」で、10月14日（土）、15日（日）、「ワールドコラボフェスタ2023ー発見！体験！世界大交流祭！」。2022年のフェスタでは、2日間でのべ64,000人の参加実績があったと主催者発表した大きなイベントだ。チェル救は14日（土）、ブース出展し、カードキャンペーンを展開する。カードは、戦時下のウクライナ、そして福島・南相馬の子ども達に贈る。昨年は、オープンしてすぐに子ども達や若い人たちが参加。そのあとひっきりなしに人々は訪れ、思い思いにカード作りを楽しまれた。今年は、待望の研修生＝Nたま生の大学生・久保田さんも参加。参加して下さる方々と、戦時下のウクライナや福島支援のこと、カードへの思い、出来具合？活動の話など、たくさんのコミュニケーションが取れるとうれしい。ブースの中は、出来上がったカードで平和を祈る満艦飾になるだろう。クリスマスが一足早くやってきたかのように。心弾み、温まる瞬間だ。

その次は、10月21日（土）と22日（日）。表紙で既報だが、ウクライナの子ども達の絵画展だ。YWCA・ウクライナ文化協会のご協力も得て名古屋栄・名古屋YWCAで開始される。戦禍のウクライナで描かれた子ども達の絵画は、何を語り掛けるだろう。多くの方々にご来場いただき、ウクライナの子ども達へ心を寄せて頂きたい。

### ●ご寄付情報・・・

今から54年前にその企業は、人類の三大苦「戦争・貧困・病気」そして「環境問題」解決のため、それらの問題に取り組むNGOへの支援を呼びかけるキャンペーンを展開した。ECC地球救済キャンペーンである。この目的のため、多くのNPO、NGOへの支援を途切れることなく続け、チェルノブイリ救援・中部も活動当初からご支援頂いている。とりわけロシアのウクライナ軍事侵攻に対しては、ウクライナの人々へいち早く支援を決定され、支援金は当方へ届けられた。

毎年猛暑の中、キャンペーンの事務局長は各団体を訪問される。今年も、とびきりの酷暑の中ご来訪くださり、活動報告のみならず、話は笑顔を交え多岐に亘った。支えていただいている・・・との強い思いを今更ながら抱いた。事務局の夏の一コマである。

（山盛）



発行 特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部

〒460-0012 名古屋市中区千代田5丁目11-33 ST PLAZA TSURUMAI 本館5B

TEL&FAX 052-228-6813（月・水・金 10:00～15:00）

E-mail chqchubu@muc.biglobe.ne.jp URL <http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

印刷 エープリント

